

中国の大学の日本語専攻精読コースにおける一考察

金 華

1. 始めに

日本の文化、習慣を知り、相手の心理を理解するまで、高度な日本語能力が要求される時代になってきている。日本語人材需要の現状から中国大学の日本語専攻のカリキュラム等を考えていきたい。

周知のように中日両国の経済・貿易の提携はどんどん広まっており、中国は日本の最大貿易仲間となっているし、日本はアメリカ、欧米に次ぐ中国の第3貿易仲間となっている。その現状として次のようなものが挙げられる。

①日本外務省の調べによると在中国で日本人居住人口は20万人を越えており、在中国日本企業数は10万件に達しているという。近年、中国人の消費レベルがますます高くなってきているため、日本企業での日本人の賃金を上げなくてはならないことや日本人の生活における所要費用も大きく増加しているのが現状となっている。したがって、日本企業はコストを下げるため、現地の、日本語が流暢で日本のビジネス慣行に精通している中国人を多く求めている。

②中国の国営企業が海外への発展を目指す傾向が強くなっている。現在、中国銀行など大手商業銀行、中国网通・華為などの通信企業、IT業界、さまざまな製造業、サービス業、不動産業などが日本市場へ大規模に進出し始めている。このような現状は政治、文化、経済面で著しく活気を見せている上海や広州などの「日本語人材」と呼ばれる日本語能力の高い人材の需要を高める一方である。

③日本政府の留学生の受け入れ（すでに10万人を超えている）に積極的に取り組んでいることと、留学生の多元化は日本の大手企業または民間企業の優秀人材の需要を満足させつつあるともいえる。近年、多国籍人材を採用している日本企業は増えるばかりである。

④日本語人材需要は単純言語型から言語＋専門技術の総合型に変わりつつあり、ただ言葉だけではなく、一定の専門知識と技術を備えた人材需要に変わってきている。

このような現状から見ると日本語学科の人材育成は、更なる挑戦となっている。日本語の授業のメイン科目となっている精読への期待は深まる一方である。

近年、中国の大学で日本語を専攻する学習者に、日本語をゼロから教えている。したがって、基礎日本語と中・上級日本語コース¹⁾は、日本語学科の必修科目の核心コース

である。それが中国の日本語カリキュラムという精読コースである。精読の授業をどのように行うか、どのように短時間で教授効果をあげるかがよく問われる日本語教育の課題である。目まぐるしい変化を見せている現代社会のニーズを満足させる人材育成には、伝統的教授法を生かすとともに、学習者の日本語学習の興味に合った教授法の研究が必要である。また、「読み、書き、聞き、話す」という言語習得の四つの基本機能の運用能力をいかにレベルアップさせるかという問題提起が本稿の目的の一つである。さらに、日本語習得の基礎段階から「訳す」という機能を踏まえた五つの機能の総合運用能力を育成する教授法の改善を考察することにした。この五つの機能育成を行う日本語習得の核心科目である精読の授業の問題点を取り出し、その問題点の解決を提案する。

2. 日本語学科のカリキュラム

中国の大学における日本語学科カリキュラムのうち、精読コースは大学1年から4年まで設置してあり（多少異なっている大学もある）、授業時間（コマ）数も一番多い。一般的に基礎段階（1、2年生）は週に8コマ（1コマ45分）中・上級段階（3、4年生）は週に6コマか4コマとなっている。基礎段階と中・上級段階において1学期16週間の講義を受ける。精読以外の専門科目はほとんど週に2コマとなっている。このような設置は教育部が定めた日本語専攻大学生用の指導要領に基づいたものである。『高等院校日本語専業基礎階段教学大綱』は1、2年生（基礎課程）用、『高等院校日本語専業高年級階段教学大綱』は3、4年生（中・上級課程）用となっている。それを詳しく説明すると次の通りである。

教学大綱（シラバス）には、

1. 平均の授業時間数や開設すべき授業の内容
2. 具体的な到達目標（主に中国の日本語専攻4・8級が目標）
3. 語彙や文型リスト

が記載されている。上記の二冊のシラバスは、大学で設置される科目や授業内容の基準となるほか、教育者が教科書やテストを作成する際の指針ともなっている。

精読コース（課程）の学習時間（コマ）数

- ・1年生（1、2学期）… 週8コマ×平均14～16週×2学期 = 224～256コマ
- ・2年生（3、4学期）… 週8コマ×平均16週×2学期 = 256コマ
- ・3年生（5、6学期）… 週__コマ×平均16週×2学期（個々によって異なる）
- ・4年生（7、8学期）… 週__コマ×平均16週×1学期・2学期（個々によって異なる）

* 中国では2学期制を取っており、4年間で1～8学期に分けている。

- * 第8学期は卒業論文を執筆する学期となっている。
- * 1、2年時、上に提示した学習時間（コマ）数を上回る学校はあるが、下回る学校は見られない。3、4年時は各大学によって学習時間（コマ）数はかなり異なっている。
- * 最近、大学3年まで精読の授業内容を終えてしまう学校が増えている。1、2年の時の週8コマを10コマに増やすか3年の時6コマを8コマにしたりする方法を取っている学校が多くなっている。このような現状となったことには、いろいろが原因が見られる。一つは、今の大学生の就職状況が厳しくなり、就職活動時間を増やす目的が挙げられる。もう一つは大学3年までにはどうしても日本語国際能力試験1級や中国独自で行われる全国の大学日本語専攻8級の試験に対応する狙いもある。
- * 華南理工大学外国語学院日本語学科のカリキュラム参照²⁾。表1は、注2の部分の一部をまとめたもの（筆者が教鞭をとっている大学の日本語学科で実際に実行している学習時間数や習得単位を表わしたもの）である。

表1 華南理工大学日本語学科学習時間数と単位

日本語学科	総学習時間数	必修科目	精読	聴解	会話	多読
学習時間数（コマ）	2144	960	768	224	160	128
単位（学分）	132	60	48	14	10	8
週学習時間数	——	——	8~4	2	2	2

* 必修科目は精読（基礎日語と高級日語）、聴解（日語基礎聴力）、学術論文（卒業論文）、日本新聞選読という四つの科目。

表2 華南理工大学各種課程の学習時間数と単位

課程类别		课程要求（習得種類）	学分（単位）	学时（学習時間）
理論 教 学	公共基础课（履修科目）	必修	25.0	300
		通选（全学共同科目）	16.0	256
	学科基础课（専攻基礎科目）	必修	56.0	896
		选修	26.0	416
	专业领域课（専門領域科目）	必修	4.0	64
		选修	22.0	352
	合计（合計）	必修	85.0	1260
		选修	64.0	1024
			149.0	2284
	集中实践教学环节（周）（実習一週単位）			25.0
毕业生学分要求（必要単位数）			149.0+25.0=174.0	

以上、二つの表から4年間の2284の総学習時間数に対し、日本語専攻科目の総学習時間数は2144時間、その中で精読の総学習時間数は768時間と日本語専門科目の総学習時

間数の36%を占めている。また総単位数174単位に対し48単位と28%を占め、日本語専攻の総単位132単位中36%を占めている。したがって、日本語学科の各科目中、精読の授業がいかに重要であることがわかる。授業時間数また、必要単位数としてもトップを占めていることが明らかである。

- * 基礎段階（基礎課程）における精読（または基礎日本語、高級日本語）、この時間でメインテキストにより四技能総てが扱われる。
- * 高年級段階（専門課程）における日本語授業—精読は日本語総合技能科目という名称で専門科目の一部となるが、依然として精読が授業の大部分を占める。専門課程科目の種別は以下のとおり。
- * 各大学が独自に設置した科目もある。
 - ・日本語総合技能科目・・・精読、多読、新聞選読、作文、翻訳（通訳を含む）
 - ・日本語言語学科目・・・日本語学概論や言語学概論など
 - ・日本文学科目・・・文学史や文学作品選読など
 - ・日本社会文化科目・・・日本の歴史、地理、経済、風俗など、主に日本事情という教科書を用いて授業を行うことが多い。
 - ・その他・・・各大学が独自に設置した科目（コンピューター、貿易日本語＝商務日語、日本語能力試験対策など）

上述したように精読は日本語習得で大きな役割を果たしていることが明らかである。精読の授業をいかに効率よく行うかが今問われる重要な課題であろう。中国の日本語教育で精読の授業はいったいどんな問題点を抱えているかを本稿で詳しく論じていくことにする。

3. 精読とは

中国のどの大学においても日本語教育のカリキュラムの中心は「総合日本語」という科目で、それは普通「精読」と言われている。精読は全科目の中で最も授業の時間数が多く、また大学の4年間（3年間ですべての精読の授業内容を終えてしまう学校もある）にわたって設けられており、大学専門日本語教育において中核的な役割を果たしている。このことをさらに詳しく説明しよう。

精読は日本語学科の総合科目の一つであり、核心科目である。また外国語としての日本語を習得する際、最も重要な基礎科目でもあり、実践の高い科目でもある。一般的に基礎段階と中・上級段階に分けてある。基礎段階では主に基礎文法、主な語彙、文型、文の構成が授業のポイントとなっている。具体的言語現象の分析を通じて、読み、書き、

聞き、話すという4技能の能力育成のための全面的訓練を行う科目である。中・上級段階では、主に異なった文体の文章の読解力や言語知識の運用能力を高めるようにシラバスでは決められている。この段階の精読の授業は文章のあらすじ、文章の構成、作品の主題、文体、文章の特徴、レトリック手法などの分析がポイントとなっている。

精読科目は大学の日本語習得中、1年生から4年生にかけて設置されており、学習時間数も一番多い。各大学によって学習時間数は多少異なるが、日本語専門科目の学習時間数の50パーセントぐらいを占めていることが表1や注2からもわかる。筆者が指導している華南理工大学のカリキュラム（注2）の精読の学習時間数をさらに詳しく見ると、次のようになっている。

・1、2年生の精読の学習コマ数	週8コマ×平均16週×4学期 = 512コマ
・3年生の精読の学習コマ数	週6コマ×平均16週×2学期 = 192コマ
・4年生の精読の学習コマ数	週4コマ×平均16週×1学期 = 64コマ
合計	768コマ

* 第8学期は精読の授業は設置していない。

1、2年生の基礎段階の日本語専攻のカリキュラムは、中国の大学でわずかの違いはあるものの、ほとんどは精読、聴解、会話、作文という機能別科目になっている。そのなかで精読がメインになっている。言い換えれば精読は日本語学習者の入門コースであり、日本語学習で重要な役割を果たす科目である。学習者は精読の授業を通して日本語という言語の特徴を身につけることができるし、日本語習得のテクニックを覚えられるといえる。したがって、精読はほかの科目（多読、聴解、作文、翻訳、通訳）の習得の基礎になっている。

精読コースの目的といえば、学習者にとって言語学習で一番基礎のものである日本語の発音、文字、文法、句型などを身につけさせることである。また、どのようにゼロから指導する日本語学習を短期間に読み、書き、聞き、話す、訳すという五つの技能を身につけさせる科目でもある。実際の精読の授業はどうなっているかその現状を探してみたい。

4. 精読コースの教学現状について

上述のように、中国の大学の日本語学科の授業でメインとなっているのが精読コースであり、非常に重要な役割を果たしていることが明らかである。しかし、精読コースを進めるに当たってはさまざまな問題点が見られる。その現状を明らかにし、それに現れている問題点の指摘は中国の日本語教育の進展に繋がることと思われる。

1. 教材の選択

中国における大学の日本語教育で使われている教材は各大学によってだいぶ異なっている。一般的に〇〇外国語大学（たとえば、北京第二外国語大学、上海外国語大学、大連外国語大学、広東外貿外語大学など）では自主的に編成した教科書³⁾を精読の授業に使っている。「外国語」という言葉が入っていない大学では普通市販されている、また「普通高等教育国家規化教材」と書いてある大学日本語専攻用の教材を利用しているのが一般的である。精読の教材としてよく使われている教科書をあげると次のようである。2003年に出版した上海外語教育出版社の『現代日本語』（6冊）、2004年に出版した北京大学出版社の『総合日語』（4冊）、2008年に出版した上海外語教育出版社の『新編日語』（4冊）、2009年に出版した人民教育出版社の『新日本語教程』（初級2冊、中級2冊、高級2冊）などが挙げられる。この中で大学日本語学科の教材としてよく使われているのは『新編日語』である。『新編日語』が使われた歴史は古く、2008年に改版された。この教材は日本語の文法・文型の系統的習得、また各種能力試験対策のためになると認められているが、内容の実用性や新鮮度にかけていると言われている。日本語学科では学習者や社会人材の需要に応えられる教材選択が問われている。つまり、精読科目用の教科書は豊富ではなく、その種類は実に限られている。

2. 教授法の現状

日本語教育では、まだまだ伝統的な教授法が使われているのが一般的である。つまり、教師の講義が授業の大半を占めており、学生の発言、能力発揮のチャンスは極く少ないのが現状である。90パーセント以上が先生の講義であることが多い。特に精読の授業はこのような現象が目立つ。初級コースと中・上級コースを一人の教師が担当するか、ある教師は初級ばかり教えたり、ある教師は中・上級コースばかり担当したり学校によってさまざまである。どちらにしても長所もあれば短所もある。どのように哲学的に、合理的に組み合わせていくかも日本語教育の課題の一つであると思われる。近年、中国の大学の日本語学科の教師陣も若返りをしており、伝統的教授法を変えようと努力していることも現実である。しかし、決まった時間内に教授内容を完成しなければならなかったり、30人前後の学生の受け入れレベルによって授業を進めなければならなかったり、教師の任務が過重であることも現実である。また、日本語の授業は文字だけの授業になっていて、日本の文化、日本人の習慣など言葉に含まれている文化の習得がほとんどなされていないこともよく指摘される場所である。さらに、精読の授業とほかの専門科目との関連性を重視しないこと、つまり、テキストや教師の教授も孤立性が強いということである。特に日本語教育関係者一教師間の交流がほとんどないことが大学の日本語学科の現状である。ある一方、精読の授業が学習者の日本語能力試験—例えば、中国国内で行われる日本語専攻の4・6級試験や日本語国際能力試験などの対策を重視した授

業になってしまう場合が多い。試験の合格率の高低で教師の指導力や学習者の日本語力を評価する基準としていることが多くの大学で見られる。

3. 学習者の現状

日本語を専攻とする日本語学習者はさまざまである。第1志望を日本語学科としたものもあればそうでないものもある。もし第1志望として大学に入った学習者のほとんどは日本語に興味を持っているといえよう。しかし、中国で大学生の募集拡大を始めてから第2、第3志望を日本語学科、または日本語学科を志望していないものまで日本語学科の入学通知書もらい、日本語を学び始めたものも少なくない。このような現象は特に理工系の大学でよく見られる。詳しく言うと次のようなことである。ある学生は日本語学科を全く志望していない。またその学生の試験点数は志望した大学の最低採用点数を超えているが、第1志望の専門学科の採用点数には達していない。しかし、その学生はどうしても今の大学を希望していて、志願書の「割り振りに従うかどうか」の欄に「従う」を選んでいる。そのとき、外国語学科を選んだ志願者は少なく、募集予定計画人数を満たせなかったとすると、その学生は日本語学科に割り振りで入れられる。したがって、近年、多くの国立の名門大学の日本語学習者には、興味を持って一生懸命日本語を習得するものと、仕方なく、ただ名門大学の卒業証書を得るために日本語を学ぶ人も少なくない。日本語学習者の現状を項目にまとめると次のようである。

- ①学習者の学習動機はさまざまである。
- ②専門知識を身に付けることより学位を重んずる。
- ③運用能力を高めることよりテストの点数に神経を使う学習者が多い。何もかも成績で評価することになっている学校のシステムに問題があることはもちろん、大学生の数が増えることによってレベルの低下も深刻な問題になっている。
- ④専門知識を活かせる仕事に就きにくい。主な原因としては、専門知識の運用能力不足、つまり、日本語を生かせる就職先で仕事を続ける日本語学科の卒業生は極少数である。
- ⑤さらに進学（修士課程）する場合、日本語を専攻とする学習者は少なく、経済や、法律など、ほかの専門を選択する傾向が強い。

5. 精読コースにおける問題点

授業中に自然なコミュニケーションを取り入れるかどうかは、教師によって大きな差があり、また、同じ教師でも授業の進み具合や教える項目によって、かなりコミュニケーションになる場合とあまりならない場合がある。しかし、授業時間数の最も多い精読の授業で、上に取り上げたような運用を考えたやり取りが行われているということは、コミュニケーション能力を養わなければならないという現在の中国の日本語教育の問題点

である。筆者自身の教授歴と実際の授業参観や指導者の意見交換から精読の授業の問題点を次のようにまとめる。

1. 教授法の問題点

①単語や文法知識にだけ力を入れすぎるところがある。それは、日本語力の良し悪しをまず、日本語国際能力試験の合格率や中国で行われる「専業日語4・8級」合格率で評価することになっていることが主な原因であろう。

②学習者主導型授業への転換とコミュニケーション能力の養成があまり実現できないことがある。つまり、語彙力・文法力や読解力を高く育ててあるが、実際の日本語表現能力の養成にまで辿り着いてないことが多い。

③教材問題、教科書に提出されている会話を「生きた会話」の教材として活用するためには、次のような3点が重要だと思われる。(a) 会話参加者の属性や関係がどのようにその会話に反映しているかをとらえること、(b) その会話が空間的・時間的にどんな流れの中でどんな行動とともに行われているのかということ想像すること、(c) 印刷された教科書の会話の中から会話の特徴を拾い上げることの3点が重要である。しかし、このような説明は教科書にはほとんどないため、教師がこのことを意識的に捉えなければ、学習者には伝わらず、教科書に書かれている会話の文字を暗記して終わりということになってしまい、場面に即した運用力にはつながらない。

④講義の多様化と主幹講義との矛盾がますます目立つようになってくる。前に触れたが、学生の就職を考え、実務志向の講義を開設する大学が多くなっているが、実用講義の増設により、日本語の主幹講義が大幅に減らされる大学があり、多様化のため、日本語専攻としての基礎能力が弱められることになってしまう傾向が著しくなっている。

2. カリキュラムの問題点

読み、書き、聞き、話す、訳すという五つの機能を精読の授業でしっかりと身につけさせるのは、なかなか難しく、日本語教育の大きな課題となっている。大学4年という時間の問題、ゼロから習得する日本語、教師、テキスト等々、さまざまな条件の影響を受けているのが現実である。

カリキュラムの設定は教師の専門などの制限を受けてバランスが崩れたものも多く見られる。また設定したカリキュラムと実際の授業の進行とが合わないものも少なくない。

日本語学習項目の指導は比較的行き届いているが、日本社会や日本人に関する知識や理解が足りないこともなかなか解決しにくい課題である。

3. 学習者の問題点

①学習目的がはっきりしていない。まだまだ競争率が高い中国の大学受験は、多くの学習者にまず大学に入ればいいという思いを強めさせている。したがって、どうして日本語学科を選んだか、日本語を習得して将来何をするかなどもはっきりしていない上で

の大学入学になっている学習者が多い。特に、筆者の教育現場からはよく見られる事実である。

②あまりにも成績にこだわっている。なんでも成績で評価してきた小・中・高校での勉強に対する考えからなかなか脱出できない勉強法の学習者が目立つ。

③勉強意欲が強いことは認めるが、欲張りすぎている。勉強がかなり自由になってきた大学では、所属している専門科目よりほかの履修科目などの習得に時間や労力を費やしている現象がよく見られる。また、中国の大学では二つ以上の学部（双専業）の専門科目⁴⁾を履修できる制度を実施しており、4年間で二つの専門、たとえば、日本語学科、経済学科を履修し、合格したとすると二つの学科の卒業証書をもらうことができる。さらに5年間勉強し、合格したものには二つの学位（日本語専門、経済学専門学士）が与えられる。極少数の優秀なもの以外に、二つの学位をもらったとしてそれに相応した資格があるとは言えないのが事実である。

④応用能力の育成に力を入れているのではなく、資格（日本語国際能力試験、ビジネス日本語能力試験＝BJT試験等）取ることに夢中になっている学習者が多い。中国の政府機関にしろ、日本企業にしろ、日本語人材の採用資格として最初に求めるのが日本語国際能力試験1級か2級資格である。確かに書面上の資格も重要であるが、国際能力試験の1級の資格が取れたとして実際の日本語運用能力が高いとはいえないのが現状である。つまり学習者の多くは試験を受ける時点では理解できたとしても、その運用まではまだ到達していないことが事実である。

4. 教師の問題点

まず、教師の日本語力がかかなり弱いことが大きな問題点であろう。語彙を覚え、文法を理解し、厳密に訳し、そして暗誦するという方法で、中国の大学における日本語教育は進められてきたが、21世紀になって、学習者主導型授業への転換とコミュニケーション能力の養成が強調されるようになった。次々と出版される教科書には各課に会話があり、会話の特徴である呼びかけ、相づち、感情表現なども取り入れられるようになってきた。しかし、これらが教授・学習項目として教科書に詳しく取り上げられることは少ない。そこで教師には、書かれている会話の中から、会話の特徴を見抜く力が求められるが、それをうまく見抜いて正しく学習者を導いていく教師は少ない。

次に、日本語学科の歴史が長い北京第二外国語大学、上海外国語大学などの名門大学はまだまだよいのではないかと思うが、一般の大学の日本語教師の専攻が言語あるいは文化などに偏っていたりして、日本文学などの科目が担当できる教師が全くいないということも問題点であろう。

また、日本語学科で使用している教科書は、担当教師が決めるようになった大学が多くなっている。そこで、教師は、内容はどうであれまず自分が使い慣れた教科書を選択

する傾向がよく見られる。それに各教師が使っている教科書の内容が長を取り短を補うことが少なく、ばらばらになっていることも問題になっている。

さらに、教師のチームワークの形成が成り立っていないのは、中国の日本語教育での大きな問題点である。特に学習者の日本語能力高低の判断基準は精読時間の教師にかかわっているという考えを持ったものが多く、皆で力を合わせての学習者のレベルアップへの努力がほとんど見られない。たとえば、精読の授業でどのレベルまでの習得ができたかを問わず、作文の授業や読解の授業を進める傾向が強い。

最後に、中国では海外に流出した人材を呼び寄せるため、いろんな対策を取っていることは周知の事実である。大学ももちろん、教師の受け入れで、海外帰国者を優先する傾向が強い。つまり、中国国内で取得した学位より海外の大学で取得した学位を盲目的に優遇するなど、実際はそこには危険が潜んでいるといってもよい。つまり、日本で博士の学位を取ったとしても皆が皆日本語を教えられるわけではない。日本語を系統的に勉強したことがないものも少なくない。一方、これも日本語教師の不足から起きた深刻な問題であると思われる。

6. 精読コースの教授法への見解

まず、始めに伝統的な日本語教授法を見直すことである。

基礎段階の知識の伝達を、よりしっかり、より正しく身につけさせること。つまり語彙や文法の説明の際、ひとつひとつの言葉だけではなく、その中に含まれている日本人の習慣、文化、考え方を交えた伝達が必要であろう。日本人によって書かれた文章を多く読ませ、その微妙な表現方法を身につけさせることである。

中・上級段階での授業はできるだけではなく、必ず日本語で行うこと。

外国語を習得する環境作りが大事である。外国語習得では必ず自律習得が提唱されているように、学習者同士で習得したばかりの語彙や文法、文型を使つての自由選択練習、ロール・プレイ、タスク練習などを積極的に取り入れるべきである。日本語の学習段階がまだ初めのころは、日本文化、日本人の考え方について教えておく。語彙や文法の間違いだけでなく、テーマの内容やその配置・構造が適当かどうかにも重点を置く。文章のジャンルによって異なる形の練習をさせ、文章・作文の構成に役立てる。

学習者に大声を出して読む習慣を身につけさせることも大事だと思う。F. L. ビローズ(1962)では「九々の表を覚えるにあたって、印刷された数字をじっと見つめるよりもその表を大声で繰り返し言うてみるほうが覚えやすい」と述べている。つまり、流暢に正しく読むと正しく話せるようにも、書けるようになる基礎になるということである。

授業中、学習者の誤りは即座に訂正してやるべきであろう。しかし、訂正する際、気をつけなければならないことがいくつかある。訂正しすぎて生徒を苦しめたり、簡単な

応答が習得されないうちに長い複雑な応答を求めたりして間違いを多くすることは、学習者の日本語に対する関心や興味をなくしていく恐れがあるからである。したがって、その時々々のタイミングや学習者の反応などを気にしながら訂正を行っていく必要があると思われる。

学習者をほめることも日本語教育では欠かせない重要な教授法であろう。精読の授業は日本語習得では基礎の基礎であると同時に一番重要な役割を果たす科目である。子供であれ、大人であれ、勉学や仕事でほめるということは勉学も仕事も上手にさせるひとつの術だと筆者は考える。筆者はある学習者に「先生にやっとなほめられるようになったからもっとまじめに日本語を勉強しようと決心しました」と言われたことがある。認めてやることは、学習者に自信をつけさせる教育のポイントの一つであろう。

母語の影響を克服し、日本人のものの考え方、習慣、文化を配慮した作文教材の開発を進めることが急務である。どの国の国語の習得でも作文を重要視するように、外国語の習得のひとつの方法として作文を書くことが重要であると思われる。作文を添削して終わりにするのではなく、もう一度添削された作文を学生に書きなおさせ、またその作文内容によく使われる語彙や決まり文句、慣用句を暗誦させる。また、次の授業ではその作文を口頭発表させる。このように日本語教育は言語教育と一般に、繰り返しの練習が必ず必要となる。

最後に、精読の授業で3分ないし5分間のスピーチをやらせるのも日本語の作文や日本語表現能力育成には大きな役割を果たすことができると筆者は考えている。

7. 終わりに

確かに中国の日本語教育の中で精読の授業は重要な位置を占めている。しかし、精読の授業だけで日本語教育の目的を達成できると言い切ることはできない。また、日本語学習者の日本語の良し悪しだけで精読の授業の良し悪しを決めてしまうのも、全く根拠が無いことであろう。精読の授業の目的を達成するには、授業のコマ数は少なくともカリキュラムとして成り立っているすべて科目がバランスよく、お互いに補い合いながら授業を進めていくことこそ今後の日本語教育の更なる発展につながると信じている。日本国内での教育と異なり、学生が習った日本語を発する機会は講義時間内に限られており、精読授業中に教師の質問に日本語で答えるだけではとても十分な練習とは言えない。

また日本語習得の一番基本の日本語の基礎をしっかりと学ぶことである。しかも日本語の言語知識だけでなく、幅広い文化・社会知識を学ばせ、質の高い養成を行うためには、語学と文科系の経済学・商学・法学・経営学・文学などの専門科目をカリキュラムの中で、うまく組み合わせることを提案する。それに21世紀はアジアの時代といわれる今日、日本はアジアの唯一の先進国である。日本語がグローバル化時代で大きな役割を果たし

中国の大学の日本語専攻精読コースにおける一考察

类别	课程 代码	课程名称	是否必修	学时数			学 分	各学期周学时分配								
				总 学时	上 机	实 验		一	二	三	四	五	六	七	八	
				专业领域课	144021	日语报刊选读		必	32			2.0				
	144098	学术论文写作	必	32			2.0							2.0		
	144026	高级日语口译	选	32			2.0					2.0				
	144197	现代日语语法	选	32			2.0			2.0						
	144028	日语概论	选	32			2.0				2.0					
	144217	汉日翻译(一)	选	32			2.0					2.0				
	144218	汉日翻译(二)	选	32			2.0							2.0		
	144224	日语视听说(一)	选	32			2.0			2.0						
	144225	日语视听说(二)	选	32			2.0				2.0					
	144226	日语视听说(三)	选	32			2.0					2.0				
	144227	日语视听说(四)	选	32			2.0							2.0		
	144218	高级日语写作	选	32			2.0							2.0		
	144219	高级日汉翻译	选	32			2.0							2.0		
	144001	大学英语(一)	选	64			4.0			4.0						
	144002	大学英语(二)	选	64			4.0			4.0						
	144003	大学英语(三)	选	64			4.0				4.0					
	144004	大学英语(四)	选	64			4.0					4.0				
	144221	日语技能测试	选	64			4.0							2.0		
	144204	科技日语	选	32			2.0								2.0	
	144203	商务日语口语	选	32			2.0				2.0					
	144222	商务日语听力	选	32			2.0							2.0		
	144223	商务日语函电与写作	选	32			2.0							2.0		
	合计		必 选	64			4.0									
				选修课修读最低要求 22.0 个学分												

3) 中国の大学で、日本語教育を開始した期間が長い大学、または〇〇外国語大学、外国語教育を中心(元文科系大学)とする大学では「自編(自ら編集)教材」というものを用いる場合が多い。特に「自編」精読教科書が多く使用されている。

4) 「双专业」というのは、大学4年の間に二つの専攻を履修するということである。つまり、もし4年の間に二つの専攻の履修科目を全部履修し、成績もよく、卒業論文が通った場合は〇〇専攻・〇〇専攻と書いた一つの卒業証明書がもらえる。就職の際によく、二つの専門が得意であるとアピールすることに役立っていると言える。

参考文献

教育部高等学校外国語専攻教学指導委員会日本語組 編(2003)『高等院校日語專業基礎階段教学大綱』

教育部高等学校外国語専攻教学指導委員会日本語組 編(2003)『高等院校日語專業高年級階段教学大綱』

胡振平(2003)『現代日本語』上海外語教育出版社

彭广陆(2007)『総合日語』北京大学出版社

周平・陈小芬(2008)『新編日語』上海外語教育出版社

张厚泉・徐小明(2009)『新日本語教程』人民教育出版社

F. L. ビローズ(1962)著(1972)納谷友一訳『外国語教育の指導技術』大修館書店

言語文化論集 第ⅩⅢ卷 第2号

カッケンブッシュ寛子・尾崎明人・他編（1992）『日本語研究と日本語教育』 名古屋大学出版会
縫部義憲（2001）『日本語教師のための外国語教育学』 風間書房